

## “記号空間論”の基本視座

橋 爪 大三郎

過去約1年間にわたって、わたしは、“記号空間論”と称する独自の作業をつづけてきている。これは今後も継続するものであって、その全体像を提示して大方の批判をあおぐには、なおいま暫くの時日を必要とする。また、“記号空間論”の個別的な主題を新たに展開して、仮説の形に提示するという作業も、紙数の制約と準備の都合から、相憎とできかねる。そこで、本稿では、そのかわりに、ふたたび構想の出発点へと立ちかえって、“記号空間論”をどのような着眼と発想の上に組み立てようとしているのか、その概略を要約してのべることを試みようと思う。そこから、“記号空間論”が今後すすみゆくべき方向も、おのずから照らしだされてくるかもしれない。

### 社会の現実性はどこにあるか？

“記号空間論”は、社会に関する新しい仮説的な理論体系として、おもい描かれている。そこで、まず、理論とはそもそもいかなるものであるか、それを考え直すところから、出発しよう。

社会を研究するものの「理論的」な課題とは、なにか？ それは、言うまでもなく、ひとつの信頼すべきまどうな社会理論を構成すること、すなわち、社会事象に関する妥当な言明の体系をつくりあげること、である。（ここで、ある言明が「妥当」であるかどうかは、何らかの経験的な基準によって判定される。また、「体系」をなすとは、それぞれの（妥当な）言明相互の間の論理的な関係が、十分に明瞭に整理されていることを、いみする。）そこで、この目標を達成するためには、茫漠とした現象のひろがりのなかから、どのような水準で社会事象をつかみだしてくるのか、それをまずもってはっきりさせなければならない。

社会理論は、社会を、記述の対象とする。しかし、社会の本性をかたちづくるもの——“社会的なるもの”——は、何だろうか？ 現象的にみれば、たしかに、社会は、人間のあつまるところになりたつ事態であることに、疑問の余地はない。しかし、人間諸個体と、それらの集合態ないし群聚としての社会と、いずれを、（理論は）より real な対象とみなすべきだろうか？ この点をめぐって、古典的な社会唯名論／實在論の対立が生じてくる。社会学草創の当初からつきまどうこの対立は、記述すべき対象をどこにみとめるかについて、社会学者たちの間に、ひとかたならぬ混乱と見解の分裂とがあったことを、証示するものだ。

唯名論と實在論との対立は、決して決着をみたわけではなく、その姿をかえながら、今日のさまざまな理論的諸潮流のなかにまで伏流してきており、くりかえし新たな確執をうんでいる、と考えられるだろう。たとえば、一方に、社会体系を機能的論理によって解明しようとする機能理論の一系列がある。この理論は、ある種の客観主義の極に立つものと言えよう——なぜならば、この立場にたつ理論家にとっては、自身が対象的に把むことのできるような人々相互のつながりや挙動の全体（だけ）から、充分に、社会事象ないし社会的現実の成りたちを描きだすことができる、という方法論的な前提が、暗黙のうちに措かれているから、である。（この前提が、機能理論を、操作主義や行動主義の方法になじませるものであることは、言うまでもない。）それに

対して、またたとえば、いま一方に、社会の現象学を標榜する試みの一列が、存在する。これによれば、社会的現実とは、そもそも個体の経験のなかにしかあらわれてこないものであり、個体の経験を通して記述する以外にない、ということになる。したがって、この立場からすれば、理論の課題とは、そのままではつかみ難い経験の直接態を、何らかの方法（たとえば、現象学的記述）に依って、言説のなかにうつしかえていくことによって、果たされるはずだ、といえる。今日われわれが目にする社会学諸理論の分岐は、いまあげたふたつの立場を両極として張られる扇形のなかに、あらかた収まる、と言ってよいかもしれない。

論証抜きで語れば、機能理論派、現象学派の立場と主張は、（理論の完成度のちがいが云々を別に）それぞれに、相当の根拠と、（致命的）欠陥とを、併せもっている、とみられる。相当の根拠をもつといえるのは、双方が、社会的な現実を現に構成するふたつのモメントのうち、少くとも片方をとりあげているからであり、それが欠陥に結びつくのは、双方が、それをもう片方のモメントから切りはなし、自分の手にしたモメントだけに固執しているところに、由来する。それゆえ、双方の主張は、いがみ合いになりこそすれ、決して互いに噛みあうことがない。しかし、こうした表面はともかく、その内実において、いわゆるシステム論的発想と、経験へ固着する現象学的傾向とは、いずれも同根だ、とみるべきなのである。両者は、互いに血を同じくする一体の子でありながら、背中合わせであるために、己れの半身の何たるかを知らぬシヤム双生児（Siamese twins）にはかならない。それらは、単独では十全な理論的態度でないから、実のところ密かに他方に依存せざるをえない、ともに、分裂した近代の知性のなれの涯てである。

“記号空間論”は、システム論ないし機能論の抱えもつ根拠、現象学的試みの抱えもつ根拠、のいずれか一方のみをとりあげて他方を斬り捨てることをせず、また、双方を単に並列したり折衷したりするというものもしない。その替りに、両者がそれぞれ衝きあっているリアリティ（そのおのおのを、さしあたり、唯物論的リアリティ、現象学的リアリティ、と称しておくことが、許されるかもしれない）を、社会的な現実の2つの契機とみなした上で、それらを一貫した立場によって記述・説明することを試みようとするものである。（おのおののリアリティの内容については、言及を省略する。）このような“記号空間論”の企図は、一見したところ、その議論をはなはだ矛盾した立脚点の上に組み立てるかのような印象を、与えるかもしれない。しかし、そう考えてしまうなら、話の筋が逆であろう。社会を構成するひとりびとりの人間の社会的現実とは、そのような2重のリアリティが交錯するという矛盾においてしか、成立っていない。社会理論が解かねばならない問題の核心も、まさにそこにある。この洞察がまずあって、“記号空間論”を導いているのだ。矛盾は、理論の側にはなく、まず、社会事象存立の根柢に潜んでいる。それを、首尾一貫したひとつの理論のなかにひきだし、解きほぐしていく作業が、果たして可能かどうか、いまのところ保証の限りではないが、“記号空間論”は、人間だけが言語を行使するという事実に着眼することによって、その作業を推しすすめるというプランをもっている。このような理論構成上の特徴によって、“記号空間論”は、来るべき〈言語〉派社会学の一翼を担うるものだ、と言えよう。

そこで、つぎに、なにゆえ言語が社会理論に鍵概念を与えると考えられるのか、のべよう。

## 言語と事物

問題を稚拙な形でしか提示できないなら、その問題は解きたいジレンマをなすように思われ

てしまう。唯名論かさもなければ實在論かという択一も、もちろん、そのように提示された問題のひとつであったろう。今日、社会理論がまったく如何ともしがたい混沌とした分裂状態におちいつているのも、同断である。それでは、どこをどう考えなおせばよいのか？

社会は人々が集合するところに営まれている。この現象を、個体と全体とに切りわけた上で、そのいずれに現象の現実性が宿っているかを問うところに、先の疑問は成立していた。しかし、そのまえに、そもそも人々が社会という場で相互に交渉することが、どのようにして可能となっているのか、その根拠からまず問うていくことが、重要であると思う。

人々は、どのようにして、互いにかかわりあうことができているのか？

人々が相互に交渉しあう仕方に注目する考え方が、これまでになかったわけではない。P. Blauのような交換理論の発想では、経済学的な市場行動の理論からの並行関係（類推）において、社会行動を扱おうとする。（しかし、この並行関係が有効にはたらく範囲は、きわめて小さいだろう。）また、たとえばR. Jakobsonのような、コード/メッセージ図式の場合には、コードを共有するという前提を基礎にして、伝達の回路がはたらく機制が導かれる。（しかし、この理論枠では、コード（社会性の実質）が存在することが前提され、その存立自体の根拠は不問に付されてしまっている。）総じて、在来のコミュニケーション論のあらかたが、わたしを満足させないのは、社会が、コミュニケーションへと不可避にさしむけられている人間たちの織りなす構成体であることを、そうした議論が、十分に洞察しているわけでも、また、根拠づけているわけでも、なかったからである。（ここで「あらかた」と言ったのは、あえて捜せば、C. Lévi-Straussの構想したコミュニケーションの一般理論の如くに、その例外と言ってよいかもしれないものがみつかるとは、彼とても、ただ仄めかしてみる以上にその着想を仕事の中に定着させるだけの精力を割いたことがあるわけではない。）

社会をかたちづくる人々の交流の基礎には、人間がことばを喋る存在（homo loquens）であるという事実が、厳として存する。この事実に着目するところから、社会理論を構成していこうとする作業の系譜を、〈言語〉派社会学と総称する、とさしあたり考えておこう。“記号空間論”は、この系譜をうけて、この事実をつぎのように受容する——もし、言語現象が人間に固有であることに目をとめるなら、人間社会は、決して個と全体との2項図式によって想いえがかけたりしてはならず、そのもっとも単純な場合といえども、個体と個体との間に介在するもう1つの項、言語ならびに事物を含めた、3項図式においてつかまれるのでなければならない、と。これを、いっそう図式的にまとめると、人—人（あるいは、個/全体）ではなく、人—〈言語〉—人（あるいは、個/〈言語〉/全体）という着眼を外さないこと、と言えようか。（〈言語〉という表記は、まだ厳密なもののように用いてはいないが、ふつうにいう（狭義の）言語ばかりでなく、それと似たような特殊なあり様をするさまざまな事物にも併せて言及する場合に用いる；と了解していただきたい。誤解を覚悟で略記すれば、〈言語〉=言語+事物、ということになる。）

言語、そして事物が、社会の基本的な範疇のひとつであり、社会理論が記述すべき対象を構成する、などという主張を耳にすると、そんなばかげたことがあるわけではない、と目をとがらせたくなくなるのが、あるいは平均的な反応というものかもしれない——いったいなぜ、石ころや机の類いまでをも、社会学が相手にしなければならないのか？ しかし、“記号空間論”は、あえて、そうしなければならない、と主張する。人と人との真正の中間項たる言語、そして事物のあり様を説明する作業は、社会理論の課題を逐行しようとするかぎり、欠くことができない。なぜなら、

この中間項のあり様いかんによって、人と人との相互交渉のあり様それ自体もまた、大きく左右されるのであるから。〈言語〉を概念化することは、社会理論の妥当性、簡潔性を保証するために、必要な手続きだと言えるはずだ。また、言語や事物は、外部にあって観察可能な（純粋）形式として現存するものである、という点で、しっかりした方法論的根拠を提供するはずのものである。（「言語」を Saussure のいう 'langue' の意に解せば、上の指摘はもちろんあたらないが、その辺の細かな論点にたち入っている暇はない。）

事物を社会理論が考察の対象とすることが、決して珍しいことでも何でもないのである、少し考えてみればわかるだろう。たとえば、人類学では、事物を系統的に考察しなければならないという事情は、明瞭に直観されているのであって、別に M. Mauss の指示によらずとも、博物館が民具その他の蒐集に腐心するのは当り前のことである。しかし、社会理論が事物によせる関心は、単なる蒐集癖や博物学趣味から出発しても差支えないにせよ、本来、はるかにその先の方にまで深化してゆくはずのものだ。社会学はといえば、われわれの社会全体を博物館に陳列してしまうわけにはいかないのだが、そのかわりに、明晰な事物観を用意している必要がある。“記号空間論”は、「言語的定在」という概念を樹てることによって、事物の社会的なあり様を捉え、それを人間の行為分析と結びつけよう、という企図をそなえている。その際、わたしは形式的観点にたつので、記号論的な手法を援用することが可能であるが、そのようにして媒介項を分析するならば、先にのべた唯物論的リアリティと現象学的リアリティとをふたつながらに融解させる共通の培地を、わたしの議論のなかに用意できるかもしれない。

＊

ところで、このようにのべてくるなら、同じく事物に着眼するという点で相似通っているかに見える Marx の体系について、わたしがどう考えているか、ふれておく方がよいように思われる。“記号空間論”の仕事は、Marx の体系と、どのような関係にあるのか？

Marx の思想は、ある一貫した視角から、経済、政治、宗教、法、哲学、……をはじめとする、人間の活動諸領域を包括的にとり扱う理論的枠組みを与えている点で、稀有のものであろう。その体系は、事物に対する徹底した目配りによって、その議論のあらゆる一コマ一コマが支えられているゆえに、とりわけ「唯物論的」とよびならわされている。事物的世界観に裏打ちされた、この透徹した議論の体系が、“記号空間論”の最も重要な先行理論のひとつであることは、言うまでもない。

しかし、そのあらゆる魅力にも拘わらず、わたしが Marx の体系に限界を看とらなければならぬとすれば、それは、つぎのような諸点であろう。まず、時代的な制約をあげねばならぬ—— Marx は、前世紀半ばまでの最新の科学的成果を前提として、仕事をした。しかし、そののち 100 年余にわたる時の流れと科学の進展は、彼の議論の前提の少なからぬ部分を、妥当させなくしている。いかにすぐれた論述といえども、1 世紀の年月は、そのそこそこをひび割れさせずにはおかない。

だが、そうした皮相な事情は、本当はどうでもよい。Marx の個々の言説が、今日誤謬であると認められるか否かということは、Marx を批判することと、ただちに結びつかない。体系的な社会理論として、Marx の思想の組み立てを問題にしていくことが、大切だ。

わたしが、〈言語〉派社会学の確立を待望し、Marx の体系とは別に“記号空間論”を用意しなければならないと考えている最大の理由は、Marx の体系において、言語事象が理論のなかに

充分な仕方でありこまれていないために、自然哲学（人間の本性規定）が適切に構成されていないのではないかと疑っているからである。（もちろん、このような推測を裏付けるためには、一方で〈言語〉派社会学が理論として内実をえ、いま一方で文献的根拠にもとづくMarx批判がきちんとなされているのでなければならないことは、たしかだが。）事物を考察するにしても、言語のあり様と事物のあり様との密接な連関を解き明かしていくのでなければ、事物的世界の展開がなぜ人間ないし社会の様相にこれほどの決定的な作用を及ぼすのかを、厳密に明らかにすることが、できないのではないだろうか？たとえば、Marxの生／疎外の概念系列は、自然哲学に淵源している。しかし、この概念に、資本制批判のさらに強力な衝撃力を付与するためには、この概念系列を、〈言語〉を手がかりにして、記号論的に再構成してゆく作業が、必須であろう。これは、「記号空間論」の課題のひとつである。

〈言語〉に着眼する者は、〈言語〉の実体がいかなるものかを、問わなければならない。それゆえ、「記号空間論」は、身体性に関連する諸領域に、論理的な検討を加えてみることをする。

＊

予想的にのべるなら、身体は、人間の根源的な社会性の原基をなしている。言語と事物とが人間の交渉のあり様に関わりをもつことの究極の根拠は何かといえ、それは、人間が身体をもって生存する自然的な存在者であるという事実に、求められるほかは、ない。言語も、事物（正確には「言語的定在」、以下同様）も、ともに、人間の身体活動に固有の形式性——身体における分節／統合構造——をその実体として、存立しているものなのである。

大事な論点なので、もう少し詳しくのべよう。ここで注目しておきたいのは、言語・事物・身体に汎通するような形式性である。（従来、「文化」という術語が喚起してきたイメージが、比較的ここで言う「形式性」に近いかもしれない。）形式は、実質と相対的に独立である限りにおいて、これら相互の間で、いわば転移しうる。一般に、身体の活動が、言語・事物を措定するものであることは、たしかだ。しかしまた、個々の身体にそなわっている形式性はといえば、ぎゃくに、言語・事物を介して構成されてくる、と考えるほかはない。かくして、われわれは、言語・事物・身体のあいだを周回する自存的な形式性の円環の如きものに、衝きあたる。この、これ以上溯りようのない社会の根源的な様相を、何とか概念化してみようとすれば、おそらく、つぎのように言う以外にあるまい——人間は、動物種の一つとしての自然的な身体においてありながら、あるなにかの固有な能力（これを、記号能力と総称する）に基礎づけられて、自らの身体的活動を分節／統合することができ、固有な形式性を実現していくことができるのであるが、実際には、この形式性は、社会的に規範として生じてくるほかはない、と。（ここでいう「規範」には、評価的な含意は、まったく含まれていない。）

身体に、そしてとりわけその形式性に、着目するとき、われわれは、社会性の本態としての、もっとも一般的なる規範の概念に到達した。この規範は、身体（の活動）にほとんど染みついており、そのことによって、事物の、また言語の、形式性をかたちづくるものである。かくして、行為も、その特殊な場合である発話も、またその所産である個々の事物も、このような規範の現実態である、と言えるのだ。

## 〈記号空間〉としての社会

ヒトが、規範にもとづいて、自身および自身の環界を整序していくようになったとき、ヒトの群聚は、自然生態系のなかに見出される諸形態の枠をはみだすような諸形式、すなわち、記号的秩序において、自存しはじめている。このとき、ヒトのかたちづくる集合態は、社会と呼ぶに値するはずだ。このようないみで、社会を、規範に基礎づけられた形式性の支配する空間、すなわち、記号空間と称することができるだろう。わたしの言う“記号空間論”とは、ここまでのべきたったような視座から、社会を系統的に考察しようという理論構想のことである。

“記号空間論”の叙述を組み立てるにあたっては、それをいったん、いくつかの相対的に他から独立した議論に分解してみた上で、それらを論理的に再構成していく、という手順をふむのが、適当と思われる。

まず、議論のはじめには、人間の活動に固有な形式性それ自体を考察する部分をもってくるのが、よいだろう。わたしは、こうした形式性(記号的秩序)を根拠づけるものとして、記号能力を仮説している、それゆえ、ここで、たとえば能力のリストのような形で、特定された記号能力の内容を与えて、具体的に能力仮説を提示しなければならない。

実際に、能力を、どのような内容をもつものとして、いかなる手続きによって、仮説するのか? 一般に、能力の内容を特定すればするほど、理論がみちびく帰結は豊かなものになる、と言える。そして、能力の内容を特定するには、社会事象のさまざまな領域がどのように記号的に秩序づけられているのかに関して、十分に詳しい知識が要求される。それを、仮説検証のための外部基準として採用するから、である。現在のところ、この分野の作業は全般にたちおくれっていて、利用できる材量も決して充分ではない。また、記号能力は、言語能力のような単一の能力として設定されているわけではないから、外部基準も、より間接的な形でしか与えることができなくなっており、能力を仮説する手続きが一層複雑になっている。だから、能力仮説をどの程度までくわしく特定できるかについて、はっきりした見通しをのべるのは、いまのところむずかしい。しかし、つぎの諸点は、言っておいていいだろう。第1に、記号能力は、諸々の記号的秩序に実現されている規範ばかりではなく、言及可能性、構成可能性、了解可能性、……といった基本的な心的諸権能をも、同時に根拠づけるように、仮設するのでなければならない。そして、その分だけ、仮設すべき内容は、すでに絞られている、といえる。第2に、まだ記号論的分析がすすんでいない社会事象が多くあるだけに、従来気づかれていなかった証拠をみつけてこられる見込みが、大いにある。第3に、“記号空間論”の能力仮説は、従来多くの社会理論が暗黙のうちに前提していながら特定するのを怠ってきた人間理解を、この際明示的に定式化しようとする努力である。それゆえ、能力仮説を十分に特定化できないからといって、現存する他の理論にとやかく言われる理由はない。第4に、能力仮説が直接検証と結びつかなくても(いわゆる「発見の手順」が与えられていなくても)、能力概念をたてることが理論にとって有効であることに、何ら変わりはない。というのは、能力仮説の内容を試行的にさまざまに前提してみた上で、そこから演繹的にみちびきだされるおのおのの帰結が、経験的事実と背反するか否か吟味していく、という間接的な手続きをふむならば、妥当な理論体系を(いくつか)用意できるかもしれないから。わたしとしては、このような見込みにもとづいて、記号能力に関し少しでも多くの具体的な仮説を与えたいと思う。

＊

能力論については、その現実態、すなわち、すでに現存する規範の諸形態を、論ずる。（これは、叙述の順序であり、実際の作業にあっては、能力論と以下の議論とは、相互参照させつつ、交互にすすめられる。）われわれの3項図式のもとでは、媒介項の種差に応じて、記号空間をいくつかの部分空間に分離して、まず論じる。

(1) 人と人とは、何らの媒介項をへず、直接に交渉する場合、人は互いに身体として出会うしかない。このような一方の極としての領域を、（最広義における）〈性〉領域と考えておくことができるだろう。〈性〉領域は、媒介項をもたないことによって、特殊であり、社会の部分空間にとどめられる。しかし、〈性〉領域は、生殖作用の帰結として新たに生ずる人間個体を、媒介項としてもつようになる。このようにして拮がる〈性〉領域が〈性〉関係へと分節／統合される時、そこに、固有な構造をもった〈性〉空間が、社会的事実として疎外されてくる。そのなかで、〈性〉関係は、家族諸範疇による規定を受けとるだろう。家族—親族は、このような〈性〉関係から構成された複合であり、それ以外のものと考えべきではない。——こうした“記号空間論”の結論は、構造人類学の所説と相容れないものではないが、後者をさらに徹底させ、近親姦禁忌や家族諸範疇の成立を身体性にまでさかのぼって説明しようとするものである。

(2) 人が自然的諸対象に身体をもってはたらきかけ、そこに記号的な秩序を実現する場合には、人は、労働によって事物を定立している。人と人とは、事物を媒介項として交渉するときには、人は、すでに定在する事物の側から規定されながら、その行為を実現するであろう。このような場合には、（最広義における）経済事象が生起している、と言ってよい。とりわけ、実現される人々の行為が、事物を媒介項として規定しあうことを通じて、このように相互に均衡したようなときには、行為の集合態は、分業系とよぶうまになる。分業系のなかでの人間および事物のあり様は、経済諸範疇によって記述される。

事物を介することにより、行為は、他の行為の与件に転化する射程を、いちぢるしく拡大してゆくことができる。事物が身体において現に生起する行為を規定する作用の度合に応じて、社会体系のなかで行為が統合／連合される形態は、道具系、さらには資本体へと、その構造を複合化させていく。このような経済事象の様相は、つぎのべる言語空間としての社会のあり様といわば重合することにより、さまざまな変形を被って、さらに錯綜した展開をとげていくのである。

(3) 人と人とは（狭義の）言語を介して交渉する場合、人は、ふつうにいういみでの言語的な過程にある、とみなすことができる。

言語的な過程それ自体は、具身の発話者が相互にかわしつづける具体的な言語行為からなるにちがいないので、ややもすると、きわめて容易に理解できる現象であるかのように、思われがちである。しかし、言語現象の理解が、実のところそれほどたやすくはないのは、言語の抽象的な性格に因る。いったい、この抽象性は、言語が規範においてあることに、由来する。規範としての言語は、真正に間主観的なあり方をしているから、これを、人と人との媒介項として、理論のなかで独自に樹てておく必要があった。

個々の言語行為は、一方で、発話する個体のそのときどきの心的過程に密着し、その全き表出であることができる。このようなとき、ことばは、可視的な身体相互布置を適切に反映するような、人称構造をもつはずである。しかし、言語行為は、言語という純粹形式のなかで、構成された意味を疎外するにすぎない、とも言える。それゆえ、この抽象的性格にもとづいて、発話は、

いま一方で、どこまでも、発話の個別的な状況（発話者の具体的な世界）を超出していくことができる。たとえば、噂や伝承のことを考えてみれば、この事情はよく理解できよう。こうした場合、人々のかたちづくる受話—発話の円環のなかで、言語行為が社会的事実として自存化していく、という事態が生じている。このように集合的に措定され形式化する発話の内容を、言語体ということにする。

個体が、言語体のようなものを、あえて発話と解しようとするれば、個体は、それを、非人称による発話と受けとめるしかないだろう。（非人称とは、個体の人称構造のなかで、身体をもたない身体が占める位置である。個体は、その心的権能にもとづき、ある場合には、このような超越的な対象を、どうしても生みださなければならない。）社会体系の客観的なあり方は、その成員であるどの個体の個別的なあり方からも区別されているから、社会の共同利害は、このような言語体になじみやすく、そのなかに吸いよせられてくる。諺や掟のたぐいは、これである。

言語が超越的なものへとむかうこのような機制にもとづいて、言語は、いかなる抽象的な実体を措定してしまうことも、ありうる。ここに、社会が、虚構をうみだし、その上に存続していくことの、根拠があるだろう。このように、社会的にうみだされる言語諸形態は、個体とその発話との単純な関係とは異なっているので、言語空間の名のもとに考察するにふさわしい。文学—神話—宗教—伝承—法といった言語体の系列が、こうした言語空間を構成している。

＊

ここまで、媒介項の種差に応じて、記号空間としての社会を、いくつかの部分空間に下位区分するようにして、論じてきた。これら部分空間は、いずれも、規範によって通底されており、相互に密接な関係がある。したがって、つぎの段階の作業としては、これらの部分空間が、どのように複合して、全体としての社会を構成するのかを、検討しなければならない。

各部分空間の複合の仕方は、個々の社会のちがいに依りて、さまざまでありうる。たとえば、単純社会（simple society）とよばれる種類の社会は、〈性〉空間が社会の基調を与えるような社会、あるいは、〈性〉領域が経済領域と重合しているような社会、とみなしうるだろう。また、文字は、言語体が事物の耐久性を獲得することを可能にしたので、（無文字）社会の様相にある根本的な変化を招来するものであったろう。組織、権力、そのほかさまざまな重要な社会事象は、部分空間で“記号空間論”が見出した論理を適切に組み合わせた上で、はじめて解明されるはずのものである。

さて、そのうち“記号空間論”にのこされた最大の課題は、現にわれわれのおかれている社会—資本制社会の存立を解明することである。“記号空間論”の枠組みによれば、資本制社会は、特殊な—記号空間、すなわち、資本制空間として、記述されるはずである。したがって、この資本制空間の特殊性がいったいいかなる諸前提によって構成されているのかを、記号論的な根拠にもとづいて別出することが、わたしの作業の目標である。この諸前提が（記号論的に）恣意的であることが論証されるならば、資本制社会を揚棄する根拠を、手にしたと言えるであろう。この作業に、“記号空間論”の最終的な死命が賭けられるはずであるが、本稿では、その企図を確認しておくだけにとどめる。

## 命題群

本稿では、“記号空間論”の基礎的な論点をかいつまんで紹介したので、その原理論に相当す



る部分の一部を、以下、仮説的な一連の命題の形に、まとめておこう。これらは、もちろん、暫定的なものであり、論証されたわけでもないが、当面の作業仮説として採用するに足るのではないか、と考えている。

1. 個体は、記号的秩序のなかで、自らを実現する。
2. 記号的秩序は、規範として現存する。
3. 規範は、無規定な連続性に、一連の分節／統合を措定するような、形式性である。
4. 個体の経験する無規定な連続性とは、自らの身体である。
5. 心的領域は、身体との異和として存在する。
6. 心的領域は、身体を分節／統合することの反作用において、自らを世界へと構成する。
7. 世界の実質は、分節された身体性である。
8. 身体が環界に対する受容器／能動器であることにもとづいて、世界もまた2重化をとげる。
9. 世界が2重化をとげたとき、世界は個体の表出においてある。
10. 世界を表出する個体の身体活動を、行為という。
11. 行為を、自然的諸対象における変形作用という、帰結において捉えたとき、それは労働である。
12. 行為を、自然的身体の自足性という、過程において捉えたとき、それは遊戯である。
13. 行為を、それが開示する表出の、抽象性において捉えたとき、それは言語行為である。
14. 行為は、統合構造を有する。
15. 行為が定立する記号的な対象性を、言語的定在という。
16. 言語的定在は、物性が形態に及ぼす慣性律に因って、自存する。
17. 言語的定在は、行為の統合構造を複合化する。
18. 言語的定在は、行為の連合構造を拡大する。
19. 言語の形で定立された言語的定在を、言語体という。
20. 社会体系は、行為の統合／連合構造として、記述される。
21. 行為の共時的相互決定の観点からみた社会体系を、分業系という。
22. (固有の)疎外は、行為の統合構造における偏倚として、記述できる。
23. 行為の連合構造における偏倚を、差別という。

(以上の命題群はおおむね、昨年7月にまとめた「素描」から(一部形をかえて)抜きだしたもので、本稿での記述とそぐわない箇所がある。)

## 問題群

“記号空間論”の作業は、すでに示したようなアウトラインに従って、これからもすすめていくつもりであるが、その前途は、決して平坦ではない。それは、単に技術的に解決のむずかしい問題が控えている、といういみではなくて、もっと本質的な困難、すなわち、およそ社会事象を厳密な方法によって考察しようとする試みが必ず逢着するに違いないと思われる困難に、“記号空間論”もまた衝きあたる、といういみである。そうした困難のうちいくつかは、すでにわたし

を悩ませている。ここで、それらのなりたちについて開陳しておくことは、決してむだではあるまい。以下、“記号空間論”が見出すことのできた社会理論の基本的諸問題について、略説してみよう。それらは、3つほどあって、規範問題、文体問題、展開問題、と仮りに名付けておくが、本当は、互いに切りはなすことのできない問題なのかもしれない。

第1に、規範問題について。さきに、社会性の根源的な本態として、もっとも一般的な規範の概念に到達することを、みた。ところで、“記号空間論”が用意する枠組みでは、①現存する規範について、その形式的特性を記述する、②記号能力によって、現存する規範の内容を根拠づける、という2通りのロジックしか、提供していない。それでは、規範そのものの成立を、（たとえば、もっと事実関係に即すようにして）説明する論理は、つくれないのだろうか？ 十分な用意のないまま、もし無理にこれを説明しようとするならば、社会契約説の極端な形か、社会化理論の極端な形か、いずれかによるしかなくなる。しかし、このいずれもが誤まった議論であることは、“記号空間論”によるまでもなく、容易に言えるだろう。では、それにかわって、いかなる説明を用意できるのか？（この論点は、Durkheim, Saussure, Jakobson, 三浦つとむが行き詰まるところでもある。）

第2に、文体問題について。“記号空間論”は、先にのべたふたつのリアリティにまたがる形になるので、記述を構成する言説の人称構造が、単純な文体では処理しきれないようになる。すなわち、公理論的な客観的文体も、現象学的な記述の文体も、ともに、“記号空間論”の全体を構成するには、適当でない。それでは、どういう文体が考えられるのか？ 前問と同じく、この問題についても、名案はないが、こう考えられないだろうか。客観主義を皮肉る喩えに、次のようなものがある——科学者というペンキ塗りがいて、世界という部屋の床を塗っていた、とする。もし彼が、客観主義的な手つきを捨てないなら、自分の足許にペンキを塗ることは、できないだろう。しかし、足がペンキで汚れても構わないと開きなおれば、とにかく床全体を塗りあげることができる——わたしもこの際、文体や方法の斉一性は二義的だ、とみなすことにしたい。

第3に、展開問題について。理論は、現存する社会を、充分によく説明するものであることが、求められる。ところで、現存する社会は、すでに歴史的なものであって、人類発祥以来悠久の時の流れとともに発展し来たものである。理論は、このような社会の展開の系列を、どのようにして、記述のなかに移しかえるのか、もしくは、論理展開のうちに捉えることができるのか？——これは、歴史にかかわる理論や、他の社会動学を、つねに悩ませるはずの問題だ。比較社会学のように、多くの社会を、単に並列する変異体（variants）ととらえる視角だけを用意しているのなら、この問題は生じてこない。しかし、“記号空間論”は、社会の歴史性を重視し強調している。では、どうするか？ 「言語的定在」の概念は、本稿では触れておかなかったが、人間の根源的な歴史性を根拠づけるものである。もともと、“記号空間論”の援用する3項図式は、媒介項たる〈言語〉に独自の展開の論理をみとめることによって、歴史的時間の契機を含みうるように考えられている。そこで、目下は、論理ないしレトリックに工夫すれば、社会の展開に關して知っておくべき事柄を、理論のなかに定着させることができそうだ、と見つめておこう。<sup>4</sup> 以上掲げた3つの問題は、これまで気付かれた問題のうちから例示したにすぎず、その解決を示したわけではない。今後、これらの解決に少しなりと近づこうとするのは、むろんである。

本稿でのべたような視座にのっとり、“記号空間論”というプランを、当分つづけるつもりなので、願わくは、批判と助言とおよせいただきたい。（はしづめ だいさぶろう）